

1 神の選び

今日の箇所、途中の見出しの一つに、〈祝福をだまし取るヤコブ〉というのがあります(一八節)。穏やかでない言葉です。しかしまさに穏やかでないことが起こった、それが今日の箇所です。

旧約聖書の主題はイスラエルの歴史です。イスラエルの歴史は一つの家族の歴史として始まりました。始まりはアブラハムです。アブラハムからその子イサク、そしてヤコブへと続いていきます。しかし二代目イサクから三代目ヤコブへは、じつは一筋縄には行かなかったのです。

少し前に遡って申し上げれば、イサクは四〇歳のときリベカと結婚します。リベカは遠い親戚に当たります。イサクが六〇歳のとき子供が生まれます。双子で、兄の名がエサウ、弟がヤコブです。

双子とはいえ、長男は兄エサウです。このまま行けば、イサクの跡を継ぐのはエサウです。しかしまさにそうならなかった。弟のヤコブが跡を継ぎ、アブラハム、イサク、そしてヤコブと続いていったわけです。どうしてそうだったのか、それを今日の箇所は語っています。

現代人の私どもは、原因を探ります。自分なりに納得できる理由を見つけようとはします。しかしここまで二五、二六章と読んできて、なるほど何か原因を暗示するような言葉が全くないことはありませんが、なぜそうなったかというように、聖書が関心をもっているように見えません。その意味で心に留めておくべき言葉は、むしろ使徒パウロの言葉です。

リベカが、一人の人、つまりわたしたちの父イサクによって身ごもった場合にも同じことが言えます。その子供たちがまだ生まれもせず、善いことも悪いこともしていないのに、「兄は弟に仕えるであろう」とリベカに告げられました。それは、自由な選びによる神の計画が人の行いにはよらず、お召しになる方によって進められるためでした。「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」と書いてあるとおりです(ローマ九・一一〜一二)。

「自由な選びによる神の計画が人の行いにはよらず、お召しになる方によって進められるため」とパウロは書いています。そのため神はヤコブを選び、エサウを退けたというのです。

神の自由な選び、こう言われると、話はそのでお仕舞い、身も蓋もないことになってしまふそうです。しかしその選びはどのように遂行されたのでしょうか。この問いは残ります。〈なぜ〉ではなく、〈どのように〉という問いをもって読んでいくことはできます。

前の章、二六章で、私ども、壮年期のイサクのことを知りました。四〇代から六〇

代でしょうか。父アブラハムに代わって一族を率いています。寄留の民、つまり、よそ者としての生活です。争いは避けなければなりません。しかし生活のため井戸は掘り続けます。豊かになったイサクは土地の人の尊敬を勝ち得ます。こうしてイサクの信仰、その従順が聖書から伝わってきます。

さて時間は一気に進んで、今日の箇所が伝えるのは、死を前にしたイサクです。「わたしはいつ死ぬか分からない」と言うほど彼は年老いています。その中でいま家督を譲ろうとしているのです。そしてそれを長男エサウではなく、誤って弟ヤコブに譲り渡してしまうことが起こってしまった。家督を譲り渡す、ここでは「祝福」という言葉で表されています。

今日は長い箇所です。場面は大きく三つと考えるおきます。第一の場面はイサクが兄エサウに祝福を与えようとしたところ（一〜四節）。第二の場面は、それを立ち聞きしたりベカが弟ヤコブに策を授け、祝福をだまし取ったところ（五〜二九節）。第三の場面は、その後、狩りから帰って来たエサウが、イサクの求めた料理を持って祝福を受けようとしたけれども、後の祭り、祝福にはあずかれなかった。エサウの悲痛な姿を描きます（三〇〜四〇節）。殺意をいだいたエサウからイサクが逃亡する場面は次回取り扱います。

2 事件の経過

さて（どのように）事件は進行したのか、一つ一つ詳しく説明することはできません。要点だけ申し上げます。

まず最初の場面（一〜四節）。イサクが長男エサウを呼んで、家督を譲る、祝福を与える、その思いを伝えます。ここに、これ以後のすべての混乱の遠因が隠れているように私には見えます。

問題は、イサクがエサウだけを呼んだことです。エサウは長男ですから問題ないといえれば問題ないかも知れません。しかし相続人は彼だけではない、双子の弟ヤコブもそうなのです。

エサウだけを呼んだことの異様さは、ヤコブの最期（四九章）を参照してみると明らかです。ヤコブはその子ら全部、二人を呼んで、それぞれに相応しい祝福をもって祝福しています。昔、のけ者にされたという記憶がヤコブに残っていたことも、子供たち皆を呼んだ理由だと思います。

イサクは妻リベカにも黙っていました。むしろ知られないように、秘密に、ただエサウと二人だけであることを運ぼうとしているようにも見えます。どうしてそうしたのでしょうか。

イサクもリベカも、エサウのカナン人の二人の妻のことでは悩まされていたとありました（二六・三五）。しかしそれはそれとしてイサクのエサウへの特別の思い入れは変わりませんでした。彼がもってくる狩りの獲物が好物だったからという理由が前に書いてありました（二五・二八）。そんな単純なことかとも思いますが、最期のところで、人間的な偏愛、愛着、エゴイズム、そうしたものが、イサクを動かしたのです。私どもが二六章で見たあの信仰のイサクはそこにはいなかったように私には思

われてならないのです。

それと絡んでくるのが、もう一つあります。前々回、エサウとヤコブがまだ母のお腹にいたとき、胎内で子供たちが押し合っているのを不安がったリベカが主の御心を尋ね、「兄が弟に仕えるようになる」（二五・二三）との託宣を受けたということがありました。神はエサウではなくヤコブを選び、愛していることをリベカは知っていたのです。イサクは知らなかったと私は思いますが、知っていたと考えることもできますし、そう考える人もいます（カルヴァン）。イサクが神の御心を知っていてエサウに執着したとするなら、イサクは神に逆らった、自分のエサウへの偏った愛を優先したと言わなければなりません。

第二の場面です（五〇二九節）。五節に、リベカがイサクとエサウの話を「聞いていた」とあります。立ち聞きしていた。緊張が走ります。イサクの行動を阻むためにリベカが計略を立て、弱気なヤコブが、母に疑問をもちながらもそれを実行するところ、それがこの場面です。

しかし、ヤコブは母リベカに言った。「でも、エサウ兄さんはとても毛深いのにわたしの肌は滑らかです。お父さんがわたしに触れば、だましているのが分かります。そうしたらわたしは祝福どころか、反対に呪いを受けてしまいます」。母は言った。「わたしの子よ。その時にはお母さんがその呪いを引き受けます。ただ、わたしの言うとおりに、行って取って来なさい」（一一―二三節）。

「その時にはお母さんがその呪いを引き受けます」。リベカのこの確信を彼女の性格に帰してしまうことはできません。主なる神はヤコブを選んだ、それを知っているところから生じた可能性があります。神の御心を阻止しようとするイサク、これを行おうとするリベカ、二人が自覚して動いているというわけではありません。私どもにはそれが見えるということです。

第二の場面の後半は、イサクとヤコブの直接対面です。クライマックスです。異常な緊張に包まれています（一八節以下）。イサクから次々に発せられる質問に、私どもも、一緒になつて肝を冷やします。

中でも鋭い質問は、「わたしの子よ、どうしてまた、こんなに速くしとめられたのか」でした。しかしこれも想定内だったでしょう。ヤコブの答えは見事で、かつ巧妙だからです。「あなたの神、主がわたしのために計らってくださいましたからです」（二〇節）。ヤコブは、イサクに、「あなたの神」が、取り計らってくださいましたので答えています。そう言われればイサクもそれ以上疑うことはできません。そこには、イサクの神への素朴な信頼、信仰が再び垣間見られます。それも利用されたと言えませんが、それも知れません。

3 祝福と幸い

さて第三の場面です。イサクがヤコブを祝福し終え、ヤコブが退出するとすぐ、エサウが狩りから帰って来ます。イサクは欺されて、ヤコブに祝福を与えてしまったこ

とに気づき、激しく動揺します。エサウは祝福を奪われたという現実悲痛な叫びを上げ、激しく泣き叫びます。

これほどの反応を引き起こした背景に、〈祝福〉あるいは〈祝福と呪い〉が、当時どんなに重大に考えられていたかということがあります。

今も私も教会で祝福を口にします。〈子供の祝福〉をし、何より、礼拝で、祝福をします。これも祝福です。しかしイスラエルの人々は、今日の私どもとは比較にならないほど、祝福による来たるべき幸い、あるいは逆に呪いの宣言には神の力があると信じていました。言葉が発せられたとたん、言葉は働きはじめます。止めることはできません。呪いも同じです。また祝福を呪いに変えることもできないのです(ヨシユア二四・九〜一〇)。

たとえ間違つてであっても、いったんヤコブのものとなった祝福は取り返せないのです。イサクは、もうヤコブのものとなつてしていると語っていますし、エサウもまたそれを知って、泣いて叫ぶのです。

祝福ということでここで何が考えられていたのでしょうか。二七〜二九節に、その言葉があります。それが、第三の場面で、エサウへのイサクの答えの中で、もっと簡潔に示されています。

イサクはエサウに答えた。「既にわたしは、彼をお前の主人とし、親族をすべて彼の僕とし、穀物もぶどう酒の彼のものにしてしまった」(二七節)。

これがここでの祝福です。豊かな地の恵み、そして、兄弟、親族、多くの国民に対する支配権です。旧約にはその他に神の祝福として、長寿とか、子孫の繁栄とか、土地の獲得、人の幸福などが、数え上げられています。

さてこの祝福、私も、イエス・キリストの福音を知っている者として、どのような考えたらよいのでしょうか。それを最後に少し申し上げて今日の締めくくりとしたいと思います。

祝福という言葉は、新約聖書でも、イエスにおいても用いられます。例えば、山上の説教(マタイ)や平地の説教(ルカ)で、〈幸い〉という言葉で語られているのがそれです。

ルカによる福音書の平地の説教(ルカ六・二〇〜二六)でイエスは、貧しい人々は幸いだ、今飢えている人々は幸いだ、今泣いている人は幸いだ、そして富んでいる人々は不幸(わざわい)だ、今満腹している人々は不幸だ、今笑っている人々は不幸だと語っています。

こういうイエスの言葉を見れば、旧約の祝福は物質的、新約は精神的、内面的という分け方ができないのが分かります。問題は神の国です。幸いとは、神の国の現実に生かされることです。イエスと共に到来した神の国、神が私どもの主として共にいますところ、その現実にあずかることが、幸いであり、祝福なのです(ローマ一四・一七、コリント一、四・二〇)この礼拝を通して、今日も、私もその祝福にあずかりたいと願っています。

(二〇二二年九月一八日)